

Title	特集にあたって
Sub Title	Preface
Author	中西, 聡(Nakanishi, Satoru)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2025
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.41, (2024.), p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 近代日本の地域社会・業界と慶應義塾：ローカル・リーダーの視点から
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20240000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集にあたって

中西 聡

慶應義塾福沢研究センターは、二〇二二（令和四）年度よりセンター内研究会として、「近代日本の慶應義塾とローカル・リーダー」を開始した。『近代日本研究』第四一巻の特集はその研究成果の一部であるが、その趣旨をはじめに説明しておきたい。

慶應義塾が近代日本社会に多くの人材を輩出したことは周知の事実であるが、それらの人材の活動を地域社会や特定業界の視点から考察することが上記のセンター内研究会の目的である。現在でも、慶應義塾出身者の組織である三田会が社会のいろいろな局面で重要な役割を果たしているが、それらの三田会は主に地域別・業種別に活動されてきた。本センター内研究会では、こうした三田会の歴史的源流を探るとともに近代日本の高等教育機関が地域社会の近代化・産業化に果たした役割をも考察することを目的とする。もちろん、慶應義塾が、国家的規模で活動する財閥系企業に多くの人材を輩出してきたことが先行研究でも指摘されているが、福

沢諭吉は、他方で、地域社会の振興にも深い関心を寄せており、その両者の関係を考えることも重要である。その点は、中西聡の特集論文のまとめで再論するが、特集にあたって福沢諭吉の地域社会観を確認しておく。

史料1 福沢諭吉の演説（一八八三（明治一六）年六月、三田演説会にてと推定⁽²⁾）

（前略）資産ある身分にて且つは文明の学問を磨き得たる人なれば、その郷里にはおのれの学問を実業に応用すべきの余地あり資本あり、前途の希望また確実のことなれば、その学問の成就次第、大東京の学問を携帰してその郷土に事業の地を求むるこそ、この人に取り無上の上策なれ。（中略）一朝帰郷の暁には、その徳望信用なる者が、もって事業の地を作るに足るべし。（後略）

福沢諭吉は、慶應義塾内で定期的に開催される三田演説会でたびたび演説を行うが、そのなかで明確に地域社会の振興について触れたのが一八八三年六月の演説である。このなかで福沢は、地方資産家の子弟が慶應義塾に学び、卒業後は郷里に戻って慶應義塾での学びを実業の世界に応用して、郷里で新たな事業を興すことを推奨する。慶應義塾入塾者の士族と平民の割合を見ると、一八七四年は七〇%と二九%、七六年は六五%と三四%、七八年は六一%と三八%、八〇年は四七%と五一%、八二年は四二%と五七%と八〇年以降は平民の割合が士族を上回るようになった。また入塾者の出身地の分布を、一八六三年～八二年の二〇年間と八三年～九七年五月の約一五年間の合計でそれぞれ比較すると、五畿内が三・四%と四・八%、東海道が二八・八%と三九・四%、東山道が一五・三%と一七・〇%、北陸道が八・〇%と七・一%、山陰道が三・一%と二・四%、山陽道が八・九%と六・二%、南海道が一二・七%と五・七%、西海道が一九・〇%と一一・七%、北海道が

○・七％と二四・五％であった。士族の多かった八二年までは、長岡藩・金沢藩・福井藩のある北陸道、萩藩のある山陽道、和歌山藩・高知藩のある南海道、中津藩・熊本藩のある西海道など、大藩のある地域からの入塾者が多かったが、八三年以降は、比較的各地からバランスよく入塾者が存在した。こうした地方出身の平民塾生が卒業後も交流を深めるための組織として、商業倶楽部が一八九二年に設立され、設立の際に、福沢諭吉は次のような演説を行っている。

史料2 福沢諭吉の演説（一八九二年十一月、慶應義塾商業倶楽部にて）⁽⁴⁾

この商業倶楽部は世間に知る者なけれども、本塾学生の中にて各地方農商の子弟が、在塾中互に相識るを好機会とし、学余の時を偷んで実業の要を取り調べ、互いにその知る所を語り、または書についてこれを求め、切磋琢磨の間に相識の情を厚くし、業成り家に帰る後は長く旧友の好を存し、互いに気脈を通じて利益を得んとするの目的にして、老生の最も賛成する所なり。（中略）父母祖先の恩沢に浴すること厚き身分なれば、その遺産を大切に守るべきは無論、なお進んで経営してますます家道の隆盛を謀るこそ子孫たる者の本分なれ。すなわち諸君が今日倶楽部結合の挙あるも、その目的はこの辺りにあることならんと老生のあえて信ずる所なり。（後略）

地方出身者が慶應義塾に学び、互いに親交を深め、郷里に戻って家業を興隆させた後も、互いに気脈を通じて相互の利益を得ることが商業倶楽部の目的であり、それに自分は全面的に賛成することを福沢は表明する。おそらく、この商業倶楽部が先駆けとなって、一九〇〇年代以降に各地で三田会（三田倶楽部）あるいは慶應

俱樂部が設立されるようになったと考えられる。

ただし、地方出身者が慶應義塾で学ぶには、生家に相当の資力が必要であり、幕末維新期において、そのような地方資産家の業種として考えられるのは醸造業であった。醸造業は、幕末維新期の日本で最大の生産額を示す産業であり、しかも主に農村工業として日本各地で展開していた。⁽⁵⁾そして福沢諭吉も醸造業の振興には深い関心を寄せており、地方の醸造家の近代化への相談にも快く応じていた。⁽⁶⁾そのこともあり、一八八〇年代以降、地方の有力醸造家の子弟が慶應義塾で学ぶことになった。

表1は、近代期の慶應義塾出身で、各地で有力醸造家となったものを一覧にしている。むろん、家業が醸造家のものが多く、慶應義塾卒業後に郷里に戻って家業の醸造業を継いだと考えられる。前述のように商業倶楽部は一八九二年に設立され、八〇年代から増えた地方出身の平民入塾者が、最終的に慶應義塾を卒業するのが一八九〇年前後と考えられ、九〇年代から表1に挙げられたものが増大する。なお、卒業所属で「特選」とあるのは、「特選塾員」を意味する。慶應義塾に卒業制度が設けられたのは一八七三年で、慶應義塾の経営に参画する資格を有するものとして「塾員」が八九年の慶應義塾規約で定められた。塾員は、慶應義塾卒業生、卒業制度以前に慶應義塾で学んだもので卒業相当と認められた特選塾員、慶應義塾の卒業生ではないが、義塾の縁故者で功績のある特選塾員からなる。⁽⁷⁾

表1に見られるように、慶應義塾出身の醸造家は北海道から九州まで全国に広がっており、醸造業を営むばかりでなく、帝国議會議員、地方議員、銀行役員などにもなっており、地域経済・地方政治の担い手でもあった。また、一八九〇年代の卒業生は、伊澤平太郎が後の当主の弟、濱口権も濱口儀兵衛家の分家、中塾良吉が婿養子で中塾又左衛門家の分家と、当主の跡取りよりは次三男や分家が多かったが、一九〇〇年代以降は次第

に当主の嫡男が慶應義塾で学ぶようになり、一九〇九年卒業の近藤利兵衛、一四（大正三）年の肥塚儀三郎は有力醸造家の跡取りで、中埜良吉の本家の当主中埜又左衛門も一七年に特選塾員となった。そして次世代になると、一八九〇年代は当主の弟が慶應義塾に学んだ仙台の伊澤家も、当主の嫡男の平勝が慶應義塾法学部を一九三四（昭和九）年に卒業した。

醸造業と並んで塾員名簿の家業として挙げられるのが多かったのが、林業関係であった。表2は、近代期の慶應義塾出身で、各地で林業や材木商を営んだものを一覧している。その嚆矢は井坂直幹で、井坂が慶應義塾卒業後に秋田県能代の製材業界で活躍し、彼を中心として中小の製材業者が合同して能代製材合資会社を設立し、それが後に秋田木材会社となり、同社が日本最大の林業会社となるとともに、秋田木材会社に慶應義塾出身者が関わることになった。⁽⁸⁾例えば、一八九一年に慶應義塾理財科を卒業した清水栄次郎は大阪で材木商を営み、能代製材合資会社と秋田杉の大阪での一手販売契約を結び、その縁で清水栄次郎は秋田木材会社の大坂支店長となり、後に秋田木材の常務取締役となった。秋田県能代でも、相澤治一郎は一九一〇年に慶應義塾法律科を卒業するとともに家業の材木商を継ぎ、秋田木材会社にも入社して後にその社長となった。

なお、林業家が林地を集積して人工林を造林して林業の産業化を図ることは、近世期は江戸周辺・畿内周辺などに止まり、近代初頭に地方資産家の林業家はそれほど多くなかった。⁽⁹⁾しかし近代に入り、山林が国有林と民有林に分離され、入会権のあった共有林にも個別所有権が及ぶと、有力林業家による林地集積が一九〇〇年代に進んだ。そして、第一次世界大戦期の都市化により、木材需要が急増し、しかも第一次世界大戦期の物価上昇のなかで、それらの林業家の林地が大規模に伐採されるようになった。そのため、林産資源の資金化のなかで、目に見える形で林業資産家が各地で登場した。その結果、表2に見られるように、材木商のみでなく、

林業家の子弟も慶應義塾で数多く学ぶようになった。そして、表1と同様に、一八九〇年代は、粕谷貞吉が当主の弟、田部熊之助も当主の弟と、林業家の次三男が慶應義塾で学ぶことが多かったが、一九二〇年代以降は秋田県の村山金之助、和歌山県の神田清一、山形県の岸英一など大規模林業家の嫡男が塾員となった。

こうした大規模林業家は、第二次世界大戦後も農地改革が林地を対象外としたため、広大な林地を所有し続け、慶應義塾も第二次世界大戦後の高度経済成長期に基本財産として林地に着目した。⁽¹⁰⁾ 慶應義塾出身の林業家は、塾員の岸英一を中心に林業三田会を組織していたが、慶應義塾からの要請に林業三田会会員が中心となって応じ、「財団法人福澤記念育林会」が設立され、国有林の分収林の契約と宮城県南三陸の志津川山林の購入が行われた。その後も、三重県などで山林の寄付が行われ、これらの慶應義塾の森での活動を支援するために「福澤育林友の会」が発足した。現在は、財団法人福澤記念育林会は解散されて、分収林や所有林を慶應義塾に寄付し、それらが慶應義塾の学校林となっている。

注

- (1) 木山実・大島久幸「戦前期商社業界における学園形成」、平野隆「創成期百貨店の慶應義塾出身経営者たち」、三科仁伸「戦前期日本における高等教育機関による実業界への人材供給」、以上いずれも『近代日本研究』第三七巻、二〇二一年に所収。
- (2) 小川原正道編『独立のすすめ 福沢諭吉演説集』講談社、二〇二三年、九〇・九四頁。福沢諭吉の地域社会観について、石井寿美世「地方企業家の経済思想と福沢諭吉の地方観」(前掲『近代日本研究』第三七巻に所収)を参照。
- (3) 以下の記述は、慶應義塾150年史資料集編集委員会編『慶應義塾150年史資料集 3』慶應義塾、二〇二二年、九五―

九六頁の「慶応義塾入社生徒年表」「慶応義塾入社生徒国分表」より計算して示した。

(4) 前掲小川原正道編『独立のすすめ 福沢諭吉演説集』二四五頁。

(5) 井奥成彦『19世紀日本の商品生産と流通——農業・農産加工業の発展と地域市場』日本経済評論社、二〇〇六年を参照。

(6) 慶應義塾福沢研究センター『盛田命祺東行日記』（慶應義塾福沢研究センター近代日本研究資料（6））慶應義塾福沢研究センター、一九九六年などを参照。

(7) 慶応義塾史事典編集委員会編『慶応義塾史事典』慶應義塾、二〇〇八年、二二—二三、五一—五一七頁を参照。

(8) 以下の記述は、中西聡「近代日本における林業会社の経営展開」（『三田学会雑誌』第一一五巻一号、二〇二二年）を参照。

(9) 以下の記述は、中西聡「近代日本における林産地と林業資産家」（『三田学会雑誌』第一一二巻四号、二〇二〇年）を参照。

(10) 以下の記述は、林業三田会会員の吉田正木氏のご教示による。福澤育林友の会ホームページ (<https://kurin.jp>) も参照。吉田正木氏をはじめ林業三田会の皆様、そして福澤育林友の会の皆様に心より感謝申し上げたい。

表 1 近代日本における慶應義塾出身主要醸造業関連事業家一覧

金額の単位：円

氏名	生年	出身地・居所	卒業所属	年次	家業（会社）・公職・主要会社役員・当主との関係	営業総額			資産額	
						1907頃	1912頃	1920頃	1916頃	1928頃
塩路彦右衛門	1853	和歌山県御坊	慶應義塾	1874	酒造業・農業、衆議院議員	34	91			
加藤六藏	1858	愛知県前芝	慶應義塾	1879	醬油醸造業、衆議院議員	66				
宮永熊吉	1864	大分県中津	慶應義塾	1888	酒造業	29	62	92		
森田庄兵衛	1862	和歌山県妙寺	特選	1890	酒造業、伊都銀行頭取、貴族院議員	193	508	425		
岩崎清七	1864	栃木県藤岡	特選	1890	醬油醸造、穀物商、岩崎清七商店、慶應義塾在籍	214	1,059	○	80万	
渡邊一郎	1868	岐阜県古川	慶應義塾	1890	酒造業、製糸業、町会議員	26	94	91		
岩崎為三郎	1865	栃木県藤岡	慶應義塾	1891	醬油醸造業、岩崎醬油専務、先代岩崎清七の養子	前掲	前掲	前掲	前掲	
伊澤平太郎	1868	仙台	慶應義塾	1891	酒造業、伊澤平左衛門の弟				90万	500万
濱口権	1872	和歌山県広	慶應義塾	1891	醬油醸造業、ヤベサ醬油取締役、先代義兵衛の子で分家			4,918	700万	600万
橋本大吉	1872	広島県尾道	慶應義塾	1891	酢醸造、衆議院議員、尾道米穀取引所理事	117	30	871		
川崎秀五郎	1868	佐賀県北有明	慶應義塾	1891	酒造業、杵島郡会議員	15				
小澤猪太郎	1871	福島県上郷野	慶應義塾	1892	醬油醸造業	13				
坂口太兵衛	1870	山形県天童	慶應義塾	1892	酒造業、醬油醸造業・農業	51	153	167		
辰馬利一	1871	兵庫県西宮	慶應義塾	1893	酒造業、恵美須銀行頭取			1,476	170万	150万
多田次郎吉	1872	金沢	慶應義塾	1893	醬油醸造業・酒造業	32	47			
中荻良吉	1871	愛知県半田	慶應義塾	1895	亀甲富中荻醬油店常務取締役、中荻銀行頭取	52	29	145		50万
安孫子久右衛門	1862	山形県寒河江	慶應義塾	1895	酒造業					
河内四郎	1873	山梨県韭山	慶應義塾	1895	酒造業					
金子志郎		埼玉県戸田	慶應義塾	1895	味噌製造業	11				
山崎市治郎	1875	新潟県長岡	慶應義塾	1895	酒造業、山崎又七の長男	197	543	444		50万
濱口吉右衛門	1863	東京	特選	1896	醸造問屋、豊国銀行頭取、貴族院議員、慶應義塾在籍	249	510	3,093	500万	550万
笠原徳一	1873	北海道札幌	慶應義塾	1896	醬油醸造業、材木商、(笠原格一家)	191	383			
島勢吉		兵庫県蘆新在家	慶應義塾	1896	酒造業	76				
今井雄七	1878	東京	慶應義塾	1897	今井醸造専務、今井商店社長、今井藤七の養子				50万	300万
武安恒亮	1873	山口県小野	文学科	1897	酒造業	25	42	44		200万
小林完一	1878	山梨県増穂	慶應義塾	1898	醬油醸造業、甲府電車軌道取締役、小林多太郎の長男	25	209	159		
高柳尚吉	1877	山梨県韭崎	慶應義塾	1898	醬油醸造・質業、韭崎町長	19				
森六郎	1872	徳島県松茂	特選	1899	藍商、丸久醬油合資代表、森六商店社長	249	570	978	120万	130万
菊池清郎	1874	岩手県十二鋪	特選	1899	醬油醸造業、岩手銀行取締役	22				60万

土橋源藏	1876	長野県上諏訪	特選	1899	酒造・醬油醸造業、信州銀行取締役、後継は義兄四郎	71	299	318	80万	100万	60万
坂井寛美	1878	長野県上田	慶應義塾	1899	酒造・精米業	26					
中澤彦吉	1877	東京	特選	1903	酒醬油問屋、中澤保全合名社長、慶應義塾在籍	731	1,775	6,337	150万		
星野半六	1882	栃木県大田原	理財科	1903	酒造業、星野産業銀行頭取	89	449	221			
三輪伝七	1860	山口県周防	特選	1906	酒造業、衆議院議員、防長酒業社長	25					
梶原由平	1884	愛知県半田	慶應義塾	1906	酒造・醬油醸造業、梶原酒醬油合資、梶原由一の長男	139	38	101			
近藤利兵衛	1886	東京	理財科	1909	麦酒醸造業、近藤商事社長、帝國酒造取締役	338	1,347	3,394	300万	420万	400万
村瀬小右衛門	1887	愛知県布袋	理財科	1909	酒造業、山星酒造	25	112				
岩崎重次郎	1887	千葉県銚子	政治科	1910	醬油醸造業	388	2,422	386	85万		
島田清三	1885	栃木県植野	理財科	1910	酒造業、島田嘉内の弟	58	224				
黄金井為造	1865	神奈川県玉川	特選	1911	酒造業、神奈川県酒造組合長、日本醸造協会理事			43		60万	
伊藤益藏		広島県庄原	特選	1911	酒造業	23	58	63			
高橋彌次右衛門	1888	栃木県今市	理財科	1911	醬油醸造業、高橋彌次平の長男	53	153			100万	
大矢知金七郎		三重県八郷	理財科	1911	酒造業		18	82			
和田寛次郎	1888	青森県五戸	理財科	1914	醬油醸造業、和田醬油取締役	72	200				
中井新右門	1890	東京	理財科	1914	酒類問屋、中井銀行頭取	664	1,235	3,076	500万		
本間保次郎	1890	北海道小樽	法律科	1914	酒造業、呉服商、本間寛次郎の弟	103	228				
肥塚義三郎	1891	大阪・大阪府堺	理財科	1914	酒造業、出身は長崎県、肥塚源次郎の息子	338	1,247	957	150万	230万	200万
平賀千代吉	1892	岩手県花巻	理財科	1915	醬油醸造業、平賀かよの夫	29	〇	115			
庄司信吾	1892	山形県大石田	政治科	1916	農業、酒造業、北部製糖社長、庄司三郎の五男	18	92				
中森又左衛門	1888	愛知県半田	特選	1917	酢醸造業、中森酢店社長、中基貯蓄銀行頭取	979	2,407	2,381	100万	540万	450万
島田常敏	1893	山口県下関	理財科	1917	酒類問屋業、島田定吉の養子	39	125	325			
河相壽太郎	1894	広島県福山	理財科	1918	醬油醸造業、河相三郎の息子		185	113			
岩崎清一郎	1896	栃木県藤岡	法律科	1918	醬油醸造業、河相三郎の息子						
中島滋		茨城県舟島	理財科	1919	醬油醸造業						
武藤嘉一	1897	岐阜県大垣	理財科	1920	清酒醸造業、肥料商・セメント商、武藤嘉門の息子						
井上善右衛門	1896	宮崎県延岡	理財科	1920	酒造業、井上松三郎の弟	60					
江川徳治		福島県松山	理財科	1920	酒造業、江川酒造店合資代表、(江川清三郎家)		139				
佐藤洋之助	1894	茨城県古河	特選	1921	酒・醬油問屋、三品盛太郎は1906年慶徳理財科卒						
茂木信太郎	1895	千葉県野田	特選	1921	醬油醸造業、衆議院議員、佐藤長之助の長男	17	128				
店網義三郎		茨城県古河	特選	1921	醬油醸造業、野田醬油取締役、茂木勇右衛門の長男	160	729				
三品章正		名古屋	特選	1921	酒類醸造業、三品盛太郎は1906年慶徳理財科卒			76			
日下晃次郎	1894	広島県三津	理財科	1921	酒造業、日下賛三の次男	17					
				1921	酒造業、日下賛三の次男	59					

小栗敬五郎	1896	愛知県半田	理財科	1921	醤油醸造業・肥料商、萬三商店取締役、三郎の息子	780	3,110	6,782	50万	200万	300万
池野庸藏	1899	新潟県長岡	理財科	1921	醤油味噌醸造業、池野忠吉の娘婿		96	157			
野村隆二	1896	愛知県田原	理財科	1921	醤油醸造業、野村重兵衛家の次男	70	307				
井狩平九郎	1897	茨城県下館	理財科	1922	酒造業	90	287				
富安重行	1895	福岡県城島	政治科	1922	酒造業、富安合名代表	110	236			100万	150万
辻七兵衛	1898	石川県栗崎	経済学部	1923	醤油醸造業、辻七醤油合名代表	91	284	○		100万	
堀越孝次郎	1899	東京	経済学部	1923	酒問屋業	83	274	1,979		120万	80万
茂木房五郎	1893	千葉県野田	特選	1924	醤油醸造業、野田醤油社長、弟芳次郎が慶應経済卒	542	1,825		55万	70万	200万
宮本正治郎	1924	水戸	特選	1924	酒造・醤油醸造業						
渡邊久衛	1898	岐阜県古川	法学部	1924	酒造業、町会議員、渡邊一郎の長男	前掲	前掲	前掲			
田村吉兵衛	1901	盛岡	経済学部	1924	酒造業、田村義兵衛の次男	21					
八木幸彦	1901	奈良	経済学部	1925	酒造業、八木千之助の娘婿	64	257	221			
水谷源二郎	1902	愛知県西枇杷島	経済学部	1925	醤油醸造業、水谷源助の息子	52	304	274			
渡部又八	1868	福島県田島	特選	1927	酒造業、田島銀行頭取、田島永力電気社長	137	207	201	70万		
川上亮太郎	1900	愛媛県宇和	経済学部	1927	醤油醸造業、川上柳四郎の長男庫太郎の長男	16					
北野幸也	1903	埼玉県水富	経済学部	1927	醤油醸造業、北野正兵衛の長男	56	○	91			
白井吉之助	1901	福島県永井野	法学部	1927	酒造・醤油醸造業、白井泰藏の養子栄一の娘婿	47	129				
石川寅作	1906	東京府熊川	高等部	1927	酒造業、石川彌八郎の長男泰助の長男			241			
菅井與左衛門	1884	千葉県佐原	特選	1928	醤油醸造業	153	613	546	65万	80万	70万
安斎豊吉	1900	東京	特選	1928	味噌製造業			232			
間瀬重兵衛	1911	静岡県浜松	経済学部	1928	醤油味噌醸造業、間瀬商店合名、後継は栄一郎			854			100万
佐々木重兵衛	1898	仙台	特選	1929	仙台味噌醤油社長、東北実業銀行取締役	309			50万	320万	60万
水野正義	1906	香川県小豆郡西	高等部	1929	醤油醸造業、水野邦次郎家の長男	35	190	165			
辰馬力	1896	兵庫県西宮	特選	1930	酒造業、辰馬本家酒造社長、辰馬利一の長男	744	2,614	前掲	前掲	前掲	前掲
國分實一	1907	三重県・東京	経済学部	1930	醸造業、國分商店社長、國分勲兵衛の長男	26	102	14,033	100万	600万	800万
河北俊彌	1907	福岡県山春	経済学部	1930	酒造業・製茶業、河北俊義の長男			88			
坂口大英		山形県天童	高等部	1930	酒造業、(坂口大兵衛家か)	前掲	前掲	前掲			
紅野雄吉	1908	兵庫県西宮	法学部	1932	酒造業、紅野平左衛門の兄の孫			588		100万	70万
中村高保	1911	福岡県大湊	高等部	1932	酒造業、中村常太郎の長男	144	420	369			
濱口祐三	1910	東京	経済学部	1933	醸造品問屋、廣屋商店専務、吉石衛門の兄	前掲	前掲	前掲	前掲	前掲	前掲
伊澤平勝	1910	仙台	法学部	1934	酒造業、伊澤合資代表、伊澤平左衛門の孫	137		211	前掲	前掲	前掲
安藤安太		兵庫県大久保	経済学部	1934	酒造業			804			
緒方求也	1911	熊本県隈庄	法学部	1934	酒造業、南薫酒造株式会社、緒方求太郎の長男	40	136	115			

佐藤秀一	1911	岩手県千厩	高等部	1934	酒造業、釀業、佐藤秀平の長男			256		
高田孝	1911	大分	法学部	1935	清酒醸造業、高田保の三男	34	185	202		
鈴木兼平		三重県四日市	高等部	1935	酒造業	45	124	154		
光町傳賢	1908	広島県福木	法学部	1936	酒造業、光町英太郎の長男	26	94	104		
濱口吉右衛門	1912	和歌山県広	経済学部	1936	醤油醸造業、鮎子醤油社長、祐三の弟	前掲	前掲	前掲	前掲	前掲
濱口五郎	1912	千葉県銚子	経済学部	1936	濱屋商事代表取締役、兄儀兵衛がヤマサ醤油社長	前掲	4,918	前掲	700万	600万
肥家安雄	1914	大阪府堺	経済学部	1936	酒造業、肥家酒造店、肥家源次郎の孫	前掲	72	前掲	前掲	前掲
川村政治	1909	福井県小浜	経済学部	1936	酒造業、川村辰之助の次男			67		
重森批	1915	広島県上下	高等部	1936	酒造業、重森操の次男健の次男	21				
藤崎政太郎	1909	群馬県高崎	経済学部	1937	酒造業、出身は滋賀県、藤崎惣兵衛の長男		258	369		
沓掛敏行	1917	長野県塩尻	高等部	1938	酒造業、沓掛正一の次男	12		124		
茂木新七	1914	千葉県野田	経済学部	1938	醤油醸造業、ヒゲタ社長、濱口吉兵衛の娘婿		740	2,924	200万	200万

(出所) 福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』全5巻、慶應義塾、1986年、三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』三田商業研究会、1909年、時事通信社編集部編『代表的人物及事業』時事通信社、1913年、美業の世界社調査部編『大日本実業家名鑑』上下巻、美業の世界社、1919年、人事興信所編『人事興信録（第1・4・8版）』人事興信所、1903・15・28年（国立国会図書館蔵）、猪野三郎編『大衆人事録（昭和3年版）』帝国秘密探偵社・帝国人事通信社、1927年、猪野三郎編『大衆人事録（第12版）』帝国秘密探偵社・国勢協会、1937年、大正13年9月・昭和4年10月・昭和17年12月『慶應義塾塾員名簿』（国立国会図書館蔵）、竹内甲子雄編『財界家系図』人事興信所、1956年、三鬼隆之助監修『現代財界家系譜』現代名士家系譜刊行会、1968年、大星義明編『財界家系譜大観』現代名士家系譜刊行会、1977年、佐藤朝泰『家図』立風書房、2001年、菊池浩之『47都道府県別日本の地方財閥』平凡社、2014年、明治40・41・大正3・10年版『日本全国商工人名録』商工社、渋谷隆一編『大正・昭和と日本全国資産家・地主資料集成』第1巻、柏書房、1985年、石井寛治『資本主義日本の地域構造』東京大学出版会、2018年、附録より作成。『人事興信録』については名古屋大学大学院法学研究科の「日本研究のための歴史情報プロジェクト」が構築・公開を進めているデータベースを利用した。

(注) 掲載対象範囲は、創業家の当主の家族と当主家に近い親族で、卒業所属欄の特選は特選塾員を示す。なお氏名は卒業時ではなく、経営した時期を示した。生年の空欄は生年が不明の場合。営業税・資産額は当主家の金額、○は出所資料に挙げられたが、営業税額が不明の場合。1920年頃の営業税額は北海道と愛媛県は不明（以上は、表2も同じ）。本表では、1942年までに慶應義塾の塾員となり、醸造業関連の家業（会社）の経営に中心となっており携わった者で表で示した年次の営業税額や資産額が判明したものを示した（三大財閥は除く）。

表 2 近代日本における慶應義塾出身主要林業関連事業家一覧

金額の単位：円

氏名	生年	出身地・居所	卒業所属	年次	家業（会社）・公職・主要会社役員・当主との関係	営業総額			資産額		
						1907頃	1912頃	1920頃	1916頃	1928頃	1933頃
井坂直幹	1860	水戸	慶應義塾	1884	秋田木材社長						
前山辰吉郎	1863	千葉県八街	慶應義塾	1885	木材業						
塩谷五十足	1864	群馬県太田	慶應義塾	1888	農業・林業・衆議院議員						
牧野彦太郎	1867	岐阜県付知	慶應義塾	1890	農林業						
熊谷鏡太郎	1870	岐阜県付知	慶應義塾	1890	材木商・農業、付知銀行取締役						
清水栄次郎	1870	大阪	理財科	1891	材木商・林業、清水土地植林、店は益治郡	21		584	120万	470万	
渡谷季五郎	1865	熊本県一武	慶應義塾	1891	農林業、郡畜産組合長、肥後山林会評議員						
奥崎嘉作	1866	青森県高田	慶應義塾	1891	農業・林業						
粕谷貞吉	1870	名古屋	慶應義塾	1892	林業・農業、粕谷縫右衛門の弟、妻は諸戸家	76		340	50万	150万	100万
池田保平	1871	静岡県掛塚	慶應義塾	1892	材木商・回漕業、遠州木村専務、池田藤七の長男	31					
安宅安吉	1871	新潟	慶應義塾	1892	材木商、養鶏業						
奥村栄喜弥	1867	長野県松本	慶應義塾	1892	木材輸出商						
柴田鶴藏	1869	鳥取	慶應義塾	1892	材木商・林業						
田部熊之助	1872	鳥根県吉田	慶應義塾	1893	農業、林業、金物商、田部長右衛門の弟	383		357	300万	1,000万	4,000万
浅見竹之助	1874	岐阜県岩村	慶應義塾	1894	肥料商・製材製板業、岩村電気鉄道取締役						
盛岡隆吉	1870	和歌山県九重	慶應義塾	1895	林業・材木商、那智水力電気社長						
竹内和造		富山県布瀬	慶應義塾	1896	製材業						
渡邊篤太郎	1878	新潟県三条	慶應義塾	1897	材木商、北越商業銀行取締役						
前島丈之助	1872	岐阜県下麻生	理財科	1898	材木商、前島合資社員	123		359			
松永安左エ門	1875	大阪	慶應義塾	1898	石炭・材木商、福松商会						
鈴木宗夫	1879	静岡県下狩野	慶應義塾	1898	農業、林業、富士銀行取締役	114		176			
唐澤為一郎	1873	群馬県羽根尾	慶應義塾	1898	林業・養蚕業						
日下部武六	1880	岐阜県昔田	慶應義塾	1898	材木伐出業、日下部合名、上之保電気社長		165	○			
宮崎正一	1876	北海道湧別	慶應義塾	1898	農業・鉱業・製材業・缶詰製造業						
高橋長七郎	1875	宮城県志津川	特選	1899	農林業						100万
岩城一	1876	徳島県羽ノ浦	慶應義塾	1902	材木商						
上田源三郎	1879	兵庫県御影	理財科	1903	鉱業・織物業、上田鉱業社長、上田林業社長						
服部小十郎	1880	名古屋	慶應義塾	1904	材木商、衆議院議員	220		412	70万	200万	50万
守屋善三郎	1878	岡山県大井	理財科	1907	林業・材木商			526			250万
黒田吉治	1882	長野県飯田	理財科	1907	材木商						

平塚喜市郎 相澤治一郎 矢野時二郎 古川精一	1883 1885	宮城県石巻 秋田県能代 大坂 佐賀	理財科 法律科 法律科 政治科	1908 1910 1910 1910	農業・林業・洋服商、平塚喜兵衛の養子 材木商、相澤商店合資、秋田木材社長 材木問屋 農林業、出身地は千葉県	153 156	456	561	55万		70万
土井左門 井上信太郎 若林亀之助 平本文平 内山竹蔵 伊藤義左衛門	1886 1888 1889 1891	三重県尾鷲 大坂 東京 神奈川県中川 静岡県二俣 山形県山口	理財科 理財科 理財科 理財科 理財科	1911 1912 1912 1913 1914 1915	植林業、尾鷲印刷合資代表、土井忠兵衛の弟 井上松商店木材部代表 材木問屋、若林保全合資代表、大次郎も慶應出身 林業 材木商、内山又十の息子 農林業	22 28 43	58 83 153	169 298	150万 220万 300万		
石井貞吉 大岩鐵助 神田辨治 原田清 明石正亮 和田重義 船岡忠男 鈴木清吉 谷内多聞		神奈川県川崎 静岡県島田 山口県柳井 愛知県本郷 静岡県清水 大分県前津江 広島県 東京 高知県在厩	理財科 理財科 理財科 理財科 理財科 理財科 理財科 理財科 法律科	1916 1916 1916 1918 1919 1919 1919 1920	材木商、石井材木店合名 材木商、出身は北海道 木材業 農林業 木材業 林業 木材販売、土木請負業 木材販売業 農林業	214	○	95			
加藤岩吉 加藤義一 森本良蔵 杉浦利作 神山馨 鈴木健治 煙根三郎	1888 1895 1891	札幌 愛知県豊橋 宮城県大湊 静岡県二俣 栃木県澤山 神奈川県鎌倉 奈良県北葛城郡	特選 特選 特選 特選 特選 理財科 法律科	1921 1921 1921 1921 1921 1921	薪炭木材商 材木商、新橋製材所常務取締役 材木・木炭商、倉庫業 製材業 植林業 山林業 鉱業・植林業	61	553				
尾崎孝一 中澤幾雄 坂本治 岡部虎一 吉松亭二郎 松井謙保 堀江徳司 松元仁志夫	1898 1877	静岡県 北海道小樽 徳島県上 広島県 宮崎県相島 静岡県深良 埼玉県梅園 群馬県太田	政治科 理財科 経済学部 経済学部 法学部 特選 経済学部 経済学部	1922 1922 1923 1923 1923 1924 1924 1925	林業 木材商 木材板商 材木商 林業 林業 製材業、内外編物取締役、特殊製紙取締役 材木商 材木商		58				

特選にあたって

平田次六	1897	新潟県津川	法学部	1925	山林業・漁業・農業、平田豊次郎の長男				200万	
村山金之助	1893	秋田県土崎	特選	1926	林業、出羽林業、慶應義塾在籍、後藤喜一郎	47	3,283	○	70万	150万
木原鹿太郎	1900	奈良県豊城	経済学部	1926	森林業、木原吉太郎の長男				90万	
神田清一	1903	和歌山県串本	法学部	1927	植林業、神田清右衛門の長男				70万	50万
長井始郎	1903	三重県三郷	経済学部	1928	山林業、長井甚三郎の長男、(長井為助家)		68			
野口源一郎		前橋	経済学部	1928	材木商					
隅元保		山口県広瀬	経済学部	1928	森林業					
徳富貞四郎		熊本県田清	高等部	1928	森林業					
平田富彌		新潟県津川	特選	1929	農林業					
中西秀三		広島	高等部	1929	材木商、中西材木店 合名					
小玉滴之助		宮崎県飯肥	高等部	1930	材木商					
大前靖		和歌山県下里	高等部	1931	木材・木炭商					
鈴木正道	1908	東京	法学部	1932	林業、鈴木保全合資					70万
植村保		三重県船津	法学部	1932	林業					
福川陸平	1911	東京	経済学部	1933	山五林業会社、静岡県出身、福川忠平の長男				300万	
岡正吉	1909	秋田	高等部	1933	森林業	29	66	161		
森田俊郎	1907	山形県鶴岡	高等部	1933	材木商、森田三郎右衛門の長男					120万
木下伊平	1907	京都	法学部	1934	山林業、出身は和歌山県	43	366	453		
國分栄太郎	1910	津	経済学部	1934	材木商、國分市太郎の長男	29	○	64	100万	300万
岸英一	1911	山形県金山	経済学部	1934	森林業、岸三郎兵衛の長男					
大路康		和歌山県新宮	高等部	1934	林業					
澤木元吉	1910	秋田県船川	経済学部	1935	森林業、澤木晨吉の孫				80万	70万
田口男一		静岡県土岡多古	経済学部	1940	植林業					
新田祐一		北海道	経済学部	1942	新田ベニヤ工業監査役、父愛祐が同社社長					
山岸兼治	1919	福岡	法学部	1942	林業					

(出所) 表1と同じ。

(注) 本表では、1942年までに慶應義塾の塾員となり、林業・材木商の家業(会社)の経営に中心となって携わった者を示した(三大財閥は除く)。松永安左エ門の1920年頃の営業税額は福松商会博多支店分。東京府出身・居所の者は営業税額が資産額が判明した者のみ示した。